

第7章 学校教育の組織と文化

石井・松原

1 学校の法律的、行政的特質

- ・学校の設置者は、国、地方公共団体、および学校法人である。
- その設置者が、その設置をする学校を管理する。
- ・公立学校の学校管理権をもつのは教育委員会、学校の管理運営全般にわたって責任を負っている。
- ・教育委員会：学校の管理運営に関わる権限の一部を校長に委任し分担させている。
- ・校長：教育委員会の方針や指示に従い学校の管理運営をすることが求められている。
- ・学校の管理は、①物的管理（施設、設備、教材等に対する管理）、②人的管理（教職員の任免、校務分掌、研修等）、③運営管理（転入学、教育課程論等）の3側面。
- ・学校にはすべての教職員で校務を分掌する「校務分掌」の仕組みがある。

- ・地域住民の学校運営への参画を図るものとしてさまざまな制度があり、その中で、地域の有識者が評議員になり、外部からの視点で意見を述べる「学校評議員制度」もある。
- ・学校の組織を管理、運営していくにあたっては、法規の従うことが重要であり、それと同時に、組織や文化や教育現場の実態にも遠慮して適切に行われなければならない。

2 学校の社会的特質

1. 家庭と学校の違い

- ・家庭は、自分のありのままが尊重される(属性主義)が、学校では皆努力することが奨励される(業績主義)。
- ・家庭では、親が自分の子どもとして眞面目に見守っていてくれた(個別主義)のに対して、学校では誰に対しても公平、平等に扱われる(普遍主義)。
- ・家庭では同時にいろいろなことができた(拡散性)のに対して、学校では時間割があり、その時間にやっていいことが限られている(限定性)。
- ・親はかけがえのない存在(取り替え不可)であるのに対して、教師は学年や教科で替わる存在(取り替え可能)であり、学校では機能性が重視されていることを知る。
- ・子どもたちは家庭とは違う学校という場で教育され生活を送る中で、将来出て行く社会で通用している規範や価値(業績主義、普遍主義、限定性、取り替え可能)を学び、社会化していく。

2. 教室の形

・教室の形→長方形で教壇が一段高くなっている。

19世紀初頭のイギリスの教育で導入されたモニトリアム・システムから引き継がれたもの。

教師が一時に全部の生徒を監視し統制するのに便利な、「一望監視システム」(フーコー,M,Foucault)になっている。

このように、学校・教室は児童・生徒を統制、監視するように作られている。

3. 学校知の特質

・近代以降の学校は、人格の形成や覚醒をめざすというよりは、子どもたちに知識や技術の断片を外から注入し蓄積させることを重視してきた。

・学校においては、口頭によるものより、書かれたものが重視され(Literacy)、教育内容は日常生活からかけ離れた抽象的なもので(Abstractness)、子どもが有している知識とは関連がなく(Unrelatedness)、学習は集団行動より個人作業が主となり、個人単位で成績評価がなされる(Individualism)

4. 授業の場・カリキュラム

・教科書主体ではなく、教師と生徒が主体の授業が求められている。教師は「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」のが好ましい。教師は、教科書使うにしても、自前の資料や補助教も使いながら、教師独自の判断で、教える内容や方法を工夫する。

・学校のカリキュラムには意図的なもの(顕存的カリキュラム)と無意図的なもの(潜在的(隠れた)カリキュラムがある。
在

・意図的なものとしては、学習指導要領や学校教育目標がある。

・無意図的なものとしては、児童・生徒が学校で学び生活することによって、自然に学ぶものである。

3 学校の官僚的特質と組織特性

1. 官僚制的特質と非官僚特質

・官僚制化とは、規則による標準化、文書化、専門分化、権限の階層化を意味する。

・現代の学校は、①校長ー(副校長)ー教頭ー(主幹)ー主任といった権限の階層をもち、②一定の専門的訓練(教員養成)を受け、③教科担任制、校務分掌など、分業して職務を遂行。

・児童・生徒たちも、①教科書、時間割、成績評価も標準化され、②校則、規則により行動や服装が画一化され、③学年制により年齢で区分され、④習熟度別編成や学校格差のように能力のより分けられている。

2. 教育目標のあいまいさ

・学校の教育目標はあいまいで、その教育目標を達成する手段も明確に確立していない。どのような教育方法をとるかは、個々の学校や教師の裁量に任せられている。

・近年のあいまいさを払底し、合理化、標準化、実施化を図ろうとする改革が強まっている。

3. 学校の組織的特性

・パーソンズによれば、どのような組織、集団、システムも、その存在を維持・発展させるために、AGIL の4つの機能を満たさなければならない。

つまり、A(adaptation: 適応)、G(goal attainment: 目標達成)、I(integration: 統合)、L(latency: pattern maintenance tension management: 潜在性。パターンの維持と緊張処理を含む)の4機能。

4. チャーター(charter)の視点

・そしきに対するひとつの視点として、チャーター理論がある。それは、社会が組織として学校に付与した正当な信任状(チャーター)が、学校組織の効果を生み出すという視点である。メンバーは、社会から組織に付与されたチャーター(社会的期待と言ってもよい)を、多かれ少なかれ内面化し、それに答えようとする。

5. チームとしての学校

- ・日本の学校では、教師は子どもと遊んだり親しくまじわり、愛着・信頼関係を作ることが奨励され、授業以外の様々な学校行事も多く、それらをもとに影響力を及ぼそうとする傾向がある。
- ・授業以外の場面で児童・生徒との心のつながりを作ることを重視する日本の教師は、授業で勝負するアメリカの教師に比べ、授業への工夫やその準備の時間が少ないようであれば問題である。
- ・現在、文部科学省も、教師の授業への専念を図ろうと、「チームとしての学校」の構想を打ち出している。
「チームとしての学校」とは「日本の教員は授業以外に生徒指導、部活動等の授業以外の業務を多く行っており、授業等に専念することができない現状」から「多様な専門スタッフが子どもへの指導に関わることで、教員のみが子どもの指導に関わる現在の学校文化を転換」するとしている。

4 教師文化の特質

1. 教師の地位

- ・昔は教師の社会的地位は決して高くなかった。それは、
①教員養成課程の簡易性、②教職の科学の未発達、③専門職としての自律性の欠如、④劣悪な待遇、⑤教師の出身階層（農民層、下級公務員、労働者）による。

2. 教職症候群

- ・教職は、現状に甘んじ、向上心がないとの指摘もある。
①教師は子ども社会に安住する、②教師はお互いに競争にしない、③教師は教えるが、学ばない、④教師は人生を語らない、語れない、⑤教師は教室のなかの子どもしか知らない。

3. 教師の教育技術

- ・教師は『教育のプロ』である。子ども『教育てる』ことを専門とする職業である。

4. 教師の類型、職業モデル

- ・子どもが好きで教師になったとしても、年々歳とともに、教師の子ども好きは薄っていくという統計データもある。
- ・現代は、教師が生徒の職業モデルになりにくい時代である。教師を通して、さまざまな職業の実際の働く姿を見るわけではない。
- ・キャリア教育で、社会のなかで働く大人の姿を映像や実際で見せたり、職場体験をさせたり、世の職業人の働く姿を見させることが必要。

5 子ども文化、生徒文化

1. 子ども文化が大人や教師に反抗的になる理由

- ①自由を求める子ども、②子どもの反抗的、③反動形成、④階層間葛藤、⑤消費社会と子ども

2. 子ども文化、生徒文化への対処方法

- ・子どもの自主性、主体性の形成は、子ども文化や生徒文化を通して形成される部分も多い。子どもの反抗文化は、子どもの自尊心を傷つけたものへの反抗という意味合いもある。

子どもの自尊心の修復を何らかの方法で図る必要がある。

- ・子どもたちの行動は、それほど一貫したものではなく、状況に合わせた戦略的なものである。教師の臨機応変な対応が求められる。